

ウイグル亦都護銭の銘文

吉池孝一

—

これは古代文字資料館が管理するウイグルの貨幣で、銘文初頭の「'y δ wx」(iduq 聖なる)(注1)というウイグル語の漢字音訳により「亦都護」銭と呼ばれている。ふつうには西ウイグル国(紀元後9～13世紀)の銅貨とされる。その形態は円形方孔で鑄造になる。方孔であるところと鑄造になるところは中国銭の影響であるが、その銘文には西方の打刻銭に類似したところがある。



表



裏(無紋)

上掲画像の表に、上「'y δ wx」(聖なる)、左「yrlyγ」(勅命)、下「ywryz」右「wn」(行き渡れ)とウイグル文字ウイグル語の銘文がある。この銘文につき、森安孝夫 2004 (注2)は「聖なる勅令が行き渡りますように!」とする読みを紹介する。新疆銭幣図冊編輯委員会編 1991 (注3)は「聖命准予通行[神聖なる勅令が、(この貨幣の)通行を許可する]」と読む。前者は勅命(勅令)自体が行き渡るようにと読み、後者は貨幣が行き渡るようにと読む。私はウイグル文献の判読について門外漢であるけれども、中央アジアを含め西方の打刻銭の貨幣銘文を眺める機会があり、そのような立場から気の付いた点があるので一文とした次第である。

どのような事かという、紀元前4世紀後半のマケドニアの貨幣銘文にギリシア

文字ギリシア語で「ΒΑΣΙΛΕΩΣ ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΥ (アレキサンドロス王の[貨幣])」とある(注4)。この表現形式が基本形となり、あるいは拡張されあるいは省略され以下の貨幣銘文となっている。

- ・紀元前 2-1 世紀のインドグreek朝やインドスキタイ朝のギリシア文字ギリシア語とカローシュティ文字プラクリット語よりなる二言語併用貨幣(注5)
- ・紀元後 1-2 世紀のクشان朝のギリシア文字バクトリア語貨幣(注6)
- ・紀元後 2 世紀後半とされるタリム盆地出土の所謂シノ・カローシュティ銭。カローシュティ文字プラクリット語の銘文がある(注7)
- ・紀元後 4-8 世紀の中央アジアのソグド文字ソグド語貨幣(注8)
- ・西ウイグル国(紀元後 9～13 世紀)発行とされ銘文が両面にあるウイグル文字ウイグル語貨幣(注9)
- ・紀元後 13-14 世紀のイル・ハン朝のウイグル文字モンゴル語貨幣(注10)

その表現形式は時代や地域を越えて受け継がれており、当該ウイグル銭もその埒外ではないと考える。ギリシア以来の一連の貨幣銘文に拠る限り、その銘文の指すところは貨幣にある。貨幣とは直接の関わりを持たない内容に終始するのは普通の在りかたではない。「聖なる勅令が行き渡りますように！」とすると、行き渡るのは勅命(勅令)自体であり、勅命を主とする銘文となる。貨幣銘文としては伝統的な在り方ではない。

やはり貨幣の銘文という観点からすると、「聖命準予通行[神聖なる勅命が、(この貨幣の)通行を許可する]」のように、貨幣を主とする読みのほうが自然である。自然ではあるけれども、やや意識に傾いているようにおもう。大意は後者に拠るとして、この銘文を必ずしも主述の形式からなる一文と考えなくとも良いのではなかろうか。それで、この銘文を「'y δ wx-yrlyγ (聖なる勅命)」と「ywry-zwn (行き渡れ)」のように二つの独立した部分に分け、「聖なる勅命(は言う or において)。(この貨幣が)行き渡りますように！」と読むことにしたい。なお、銘文を二つに分けるという考えは古代文字資料館館員の協議の中から出てきたものであることを申し添えておきたい。

二

この試読を提示するにつき明らかにしておかなければならないことがある。じつは当初、亦都護銭の最初の部分を「'y δ wx」とは読むことができなかった。どういう事かというと、「'y」に続いて右下に降る線があり、この右下に降る線が「m」のように見えてしまった。これが「'y」から次の「δ」に連結する部分のふくらみで

あり他のウイグル文書にも見ることができる、ということが分かったのは、その後しばらくしてからである。いま「'yδ」で始まる語をみると下の図のようである。



idur-a(人名) iduqqut(ウイグル王の称号) 亦都護銭の iduuq
松井 1998 による 山田 1993 による

左側の idur-a は判読しづらい。「'」の後の「y」が太めであり、次の「δ」は急角度に左下に伸びている。「'y」i と「δ」d の連結部にふくらみは無い。中央の iduqqut を見ると、ふくらみの有ること明らかである。右側の写真は亦都護銭の iduuq の部分を切り取ったものである。見づらいかもしれないが、ふくらみは途切れて右下に降り「m」のようになっている。これはこの亦都護銭だけに見られる個別の特徴ではない。これと同種の貨幣が『新疆銭幣』(25 頁) に三枚掲載されており、そのいずれを見ても連結部分は途切れている。あるいはこのような途切れた書き方も認められていたのかもしれないが今は不明とするしかない。

三

問題は連結部分のふくらみの有無が資料毎にどのようなものであるかということであろう。それを手元の資料により確認すると次のようである。おもに山田信夫 1993 (注 11) により、他の資料によったものは注を付した。なおローマ字転写と語義は各書による。

連結部にふくらみが無いもの

WP02 の 2 行目 id·ip(←id・送る)
RH14 の 10 行目 id·sar(←id・送る)
Lo24 の 7 行目 idaba(人名)
Lo24 の 10 行目 idaba(人名)
Mi21 の 3 行目 idiš(抹消?,失効?)
K7719 の 13 行目 idur-a(人名) 松井 太 1998 (注 12)

連結部にふくらみが有るもの

Lo06 の 5 行目 id·urmän(←id・送る)
Lo06 の 5 行目 id·masarmän(←id・送る) (注 13)
Em01 の 17 行目 iduqut(ウイグル王の称号) (注 14)
Mi01 の 18 行目 iduqut(ウイグル王の称号)
SI4bKr.71 の 13 行目 iduq(聖なる) 梅村 坦 2002 (注 15)

このような違いが、語彙の別によるものか、それとも「d」に後続する文字の別によるものか、あるいは時代と地域の別によるものなのか、さらには幾つかの条件が複合したものであるのか、まことに興味深いのであるけれども、これも今のところ不明とせざるを得ない。

注

1) ウイグル文字のローマ字への翻字は『言語学大辞典 別巻世界文字辞典』(三省堂、2001年)の119頁の方法による。転写を提示する場合はそれぞれの参考文献による。

2) 森安孝夫 2004「シルクロード東部における通貨一絹・西方銀錢・官布から銀錠へー」『中央アジア出土文物論叢』京都：朋友書店。22頁参照。

3) 新疆錢幣図冊編輯委員会編 1991『新疆錢幣』新疆美術摄影出版社・香港文化教育出版社、194頁参照。

4) 銘文中に「貨幣」は明示されない。田辺勝美 1992『平山コレクション シルクロードのコイン』講談社、Zander H.Klawans 2003, *Handbook of Ancient Greek and Roman Coins*, Whitman Publishing. が参考となる。

5) インドグreek朝のエウクラティデス発行になる方形銅貨の表にギリシア文字ギリシア語で「ΒΑΣΙΛΕΥΣ ΜΕΓΑΛΟΥ ΕΥΚΡΑΤΙΔΟΥ (偉大なる王エウクラティデスの [貨幣])」とあり、裏にカローシュティエー文字プラークリ

ット語で「maharajasa evukratitasa (大王エウクラティデスの [貨幣])」とある。インドスキタイ朝のボォノネス発行になる円形銀貨の表にギリシア文字ギリシア語で「ΒΑΣΙΛΕΩΣ ΒΑΣΙΛΕΩΝ ΜΕΓΑΛΟΥ ΟΝΩΝΟΥ (偉大なる諸王の王、ボォノネスの [貨幣])」とあり、裏にカローシュティー文字プラークリット語で「śpalahoraputrasa dhramiasa śpalagadamasa (スパラホラの子にして法を守りたるスパラガダマの [貨幣])」とある。いずれも「貨幣」は明示されない。寺澤知美 2004 「アゼス 1 世の銀貨とシャカ族の王の貨幣」『KOTONOHA』19 号、中村雅之 2004 「カローシュティー文字貨幣 3 種」『KOTONOHA』22 号参照。

6) カニシュカ I 世の打刻金貨がある。金貨の表にはカニシュカ立像とされる像の周囲にギリシア文字バクトリア語で「ΠΑΟΝΑΝΟ ΠΑΟ ΚΑΝΗΡΚΙ ΚΟΠΑΝΟ (諸王の王、クシャン族、カニシュカの [貨幣])」とあり裏にギリシア文字で神名を記す。カニシュカ I 世には打刻銅貨もあり銘文がやや異なる。銅貨の表に「ΠΑΟ ΚΑΝΗΡΚΙ (カニシュカ王の [貨幣])」とあり、裏にはやはりギリシア文字で神名を記す。前掲田辺勝美 1992 参照。後者と同種の銅貨を古代文字資料館でも管理している。

7) 紀元後 2 世紀後半とされる所謂シノ・カローシュティー銭には大小二種がある。大銭の表にはカローシュティー文字プラークリット語で「maharajasa rajatirajasa gugramayasa (大王、王中の王にして偉大なる Gugramaya の [貨幣])」とあり、裏には漢字漢語で「重兩四銖銅錢」とある。榎 一雄 1960 「所謂シノ=カローシュティー銭について」『東洋学報』(東洋学術協会) 第 42 卷第 3 号 1-56 頁、小谷仲男 1999 「シノ・カローシュティー貨幣の年代—付録『後漢書』西域伝訳注—」『富山大学人文学部紀要』第 30 号参照。

8) 紀元後 8 世紀頃、セミレチエ地方(天山山脈の北、バルハシ湖の南)発行と思われるソグド文字ソグド語銅貨をみると、表に「tywss-γwβw」(ツクス王)と王名があり、裏には「βγγ-twrkyš-γ' γ' n-pny」(天なるテウルギシュ・カガンの貨幣)とある。このように貨幣の銘文にわざわざ「.....の貨幣」などと記す例はこの種の銘文の他には見たことがなく、ここで出てくる「pny」が真に貨幣を意味するものかどうか尚検討を要するようにおもう。スミルノヴァ 1981 『ソグドコイン総覧』(Hayka)が参考となる。

9) 表には前掲森安孝夫 2004(21 頁)によると「köl (智) bilgä (海) t(ä)ngri (天) boquq (ブクク) uyγur (ウイグル) xayan (可汗)」とあり、裏には羽田 亨 1958 「回鶻文字考」(『羽田博士史学論文集 下巻 言語・宗教篇』京都大学文学部東洋史研究会、1-38 頁。今は 1975 年版による)によると「il (国家を) tutumış (保て

る) y(a)rl(i)γ-ingä (勅命に於て)」とあるという。

10) 13～14 世紀にイランを中心とする地域に栄えたイル・ハン朝の貨幣で第 4 代ハーンのアルグンの発行したものがあある。表にはウイグル文字モンゴル語で「qayan-u nereber argun-u deledkegüüg-sen (カーンの名において、アルグンの打たせたる [貨幣])」、右端にアラビア文字で「arghün」とある。裏にはアラビア文字アラビア語で定型句「アラーの他に神なし、ムハンマドは神の使徒なり」が記され、周辺に「バグダードで 684(もしくは 694?)年に打たれた」とある。以上はサイト「古代文字資料館」の中村雅之氏の解説による。その他、ハーンの名のみをウイグル文字で記した貨幣もある。これについては中村雅之 2005「イル・ハン朝の二言語貨幣初探」『KOTONOHA』34 号が参考となる。

11) 山田信夫 1993『ウイグル文契約文書集成』大阪大学出版会発行。

12) 松井 太 1998「ウイグル文クトルグ印文書」『内陸アジア言語の研究』XIII。

13) 連結線が途切れているように見える。同一文書中に途切れていないものもあるため、これが有意味なものであるかどうか不明。

14) 17 行目としたけれども『ウイグル文契約文書集成』第 2 巻 130 頁は 15 行とする。これは 17 が正しい。第 2 巻では 11 行と 12 行が抜けたため行数がずれている。

15) 梅村 坦 2002「ペテルブルグ所蔵ウイグル文書 SI4bKr.71 の一解釈—人身売買および銀借用にかかわる文書—」『内陸アジア言語研究』XVI。